＜ 展望 ＞ ： パリで開催されたリクール・コロックに参加して

山内 誠
YAMAUCHI Makoto

冬のシャルル・ド・ゴール空港に降り立っての最初の感想は、世界地図上の位置や文芸から推測して怖れていたほどに寒くはない、むしろ出立した際の京都の方が寒いくらいだというものだった。ただし、セーヌ川は、鴨川とは比べものにならないくらいの水量を滔々と運んでおり、その流れは想像していたよりもずっと速く、深かった。

私は博士課程に在籍の川口茂雄氏と連れだって、2004年の1月14日に日本を立ち、フランスはパリを訪れ、カルティエ・ラタンに一週間ばかり滞在した。滞在の目的は主に二つあった。第一に、リクールの思想の研究者として、パリ・プロテスタント神学部で開かれた、現代フランスの哲学者ポール・リクールの思想をテーマとするコロック、「ポール・リクールにおける証言と知的なもののフィギュール」に参加すること、第二に、同学部でこのたび公開されるリクール文庫において、リクール研究のための資料を収集することである。必ずしも資金的に恵まれていない日本の大学院生がフランスでの学会に参加するというこの貴重な経験は、京都大学文学研究科21世紀 COE プログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」内、「新たな対話的探究の論理の構築」研究会による研究の一環として可能となった。この手記は、学問的な報告とは別に、その貴重な経験についての報告と感想を簡単ながら綴ったものである。

さて、1950年代からこれまで精力的な研究と著作の発表によってその名声を着実に高めてきたリクールの手になる『記憶、歴史、忘却』と題された大部の著作が 2000 年に出版された。この著作によって哲学者としてのその名声を一段と、しかも決定的な仕方で高めることになったのはよく知られている通りである。実際、新聞の書評などからは、この著作とそこに表明されているリクールの思想が、それ以前にもまして多くの関心を集め、かつ極めてすぐれた成果として好意的に受け入れられている様が見て取れる。

今回のパリでのコロックに参加することによって、この著作の出版後に、フランスでリクールの思想が実際にどのようにして受け止められ、論じられているのかという、日本ではなかなかうかがい知ることのできない実状に触れ、それを今後の研究に生かすための好機とすることが期待された。しかもコロックの参加者には、日本からは当時フランスに渡っておられた当研究室の杉村先生、フランスにおけるリクールの思想の最上の理解者の一人として知られ、近年リクールの思想を包括的に論じた著作を発表したばかりのジャン・グレイシュ氏や、長年リクールのビブリオグラフィーを手がけてきたオランダのフランシス・ヴァンシーナ氏をはじめとして、イタリアや台湾など、世界各国からのリクール思想の研究者らが席を並べており、こうした面々が一同に出揃う機会がそうはないであろうことを思えば、このコロックへの参加がリクール思想の研究者としての極めて貴重な経験となるであることは容易に予感されたことであった。むろん、海外の学会に参加することはおろか、海外に渡航することさえほとんど初めてである私にとっては、コロックへの参加に限らず、パリ滞在中の全ての経験が刺激的なものであったということは言うまでもない。

確かに、コロックにはリクール研究の分野におけるそうそうたる顔ぶれがそろっていた。しかしながら、むろんリクール思想に対する真剣な取り組みの雰囲気が漂っていたことは言うまでもないが、必ずしも形式ばったものではなかった。会場も狭く、それが自由な議論の雰囲気を作り上げていたとも言える。公開講座ということで、学生はもちろん、必

ずしも哲学プロパーではない人間も少なからず集めていたようであるが、これは、リクールの思想がフランスにおいて、哲学のアカデミックな場においてのみならず、極めて多様な領域からの、あるいは多様な水準からの関心を集めていることの証左であると言えるだろう。『記憶、歴史、忘却』の出版は、そうした関心をさらに広くから集めたに違いない。特に、午前の部を終えて午後からの発表と議論は、哲学者ポール・リクールに必ずしも囚われない、非常に自由な仕方で彼の思想を引き合いにだすものであると感じられた。そこには、リクールの思想を身近においている人達による、言うなれば思想の生かされ方の一つを目の当たりにする思いがした。しかしその一方で、私たちが日本でなじんでいる、テクストの言うところを忠実に聞き取ろうとする哲学研究の意義を再確認する思いもあったと言わざるを得ない。

さて、コロックが開始されてすぐに、思いがけない参加者があった。ポール・リクール氏その人である。これはプログラムの上では予定されていなかった登場であって、予想外の出来事であった。私が実際に氏を目の当たりにするのは実はそれが初めてではなかった。2000年の京都賞受賞の際の講演とワークショップの折りに京都で目にしてはいた。ただし、このような形で、フランスで氏と居合わせるとなると、その時にはなかった奇妙な感慨があった。私の研究対象であるテクストを生みだしてきた頭脳と、いくつかのいすを隔ててとはいえ同席しているのである。こうした経験は、一般的な哲学の研究者ではあり得ないことであろうし、また私がパリに訪れるのでなければあり得ないことだったろう。

氏は1913年の生まれであり、さすがに身体的な衰えは隠せなかったが、少なくともその頭脳に関しては老年による衰えを感じさせないほどにかくしゃくとして見えた。とりわけ、最近のジャック・デリダの不可能な赦しの思想に言及しつつ、『記憶、歴史、忘却』でも自身が論じていた「困難な赦し」について力強く語っていたのが印象的であった。残念であったのは、氏が午前の部の参加だけで中座してしまい接触の機会を持つことができなかったことであるが、それは別の機会に譲ることとした。

コロックの終了後に、リクール文庫のいわばお披露目があり、その翌日には同文庫での資料収集に当たった。ここには現在、リクールの蔵書の一部と、著作、論文等が納められている。むろん、氏は未だ現役の思索者であるから、そこに納められている蔵書はさしあたって使われることのないものであって、その意味では研究の資料としてさほど目新しいものではなかったと言わざるを得なかった。ただし、論文に関しては、特に氏の思索のいわば黎明期に当たる、日本では必ずしも手に入らない資料が数多くあり、リクールの初期の思想に関心を抱いていた私にとって、研究に生かすことのできるものを少なからず発見することができた。しかし残念ながら、その収集も未だ完全なものではない。この欠落が埋められて、コレクションが完全なものとなることが望まれる。蔵書に関しては、それが完全に納められる時があるとすれば、それは氏が思索し著述することを止める日がそれに当たるであろうから、今は望むことはすまい。

渡仏の本来の目的がそれにあったのではないにせよ、滞在中の生活の中で、否応なくフランスの、正確にはパリの文化に触れることになった。すでに述べたように、海外への渡航自体がほぼ初めてであった私にとっては、それだけで刺激的な経験であった。ただし、コロックにおいても、日常生活においても、一番身近な意味における対話の実践、つまりフランス語での会話のやりとりの実践を試されることにもなったのであるが、これは自身の語学力の未熟さを大いに思い知らせることになり、幾度も忸怩たる思いを余儀なくされた。私がより実践的なフランス語学習のための覚悟を決めたことは言うまでもないが、これは今回の渡仏の成果のいわば副産物である。

——— *Participation in the colloquium on Paul Ricoeur held in Paris*

――― 第1号執筆者紹介 ―――

氣多 雅子	京都大学文学研究科教授
竹内 綱史	京都大学文学研究科博士課程
今村 純子	京都大学文学研究科研究指導認定
川口 茂雄	京都大学文学研究科博士課程
山内 誠	京都大学文学研究科博士課程

（ 掲載順 ）

＊＊＊＊ 編集後記 ＊＊＊＊

「研究室紀要」がようやく発刊の運びとなった。氣多教授の創刊の辞及び巻頭論文にも記されている通り、確かに21世紀という時代は、古さと新しさとが共に疲弊してしまったように感じられざるを得ない、そういう時代なのかもしれない。奇しくも京都大学の哲学的伝統を築き上げてきた巨星達の訃報が相次いだ。かつては、そうした偉人達にはかなわぬとも、“そこそこ意味のある仕事”ならできるという何らかの自信が、哲学・宗教哲学に取組む者達には漠然と共有されていた様に思われる。今日若手研究者達は、果たして意味のある仕事などそもそも可能なのかという苦々しい問いを彼らの道の最初の一歩から引き受けざるを得ない状況にあるのかのようである。「専門領域」に閉じこもるという自己防衛の常套手段すらもはや余りにみすぼらしいひとつのファッションとしか見えなくなっているシニカルな時代の雰囲気は、しかしひょっとして“本当に意味のある仕事”への渇き、欲望を、躓いた時にも漠然とした自信に頼ることのできた世代には想像出来ないようなかたちで、どこかに養いつのらせていてくれたりはしないのだろうか。（川口茂雄記）

宗教学研究室紀要（京都大学文学研究科宗教学専修編） 2004年6月30日 発行

ISSN 1880-1900